HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ひとつ涙」考 ： 『源氏物語』を中心に
Author(s)	保坂, 智
Citation	国語国文研究, 156, 14-28
Issue Date	2021-02-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89214
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_156_14-28.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「ひとつ涙」考
――『源氏物語』を中心に――

保坂　智

一　はじめに

光源氏が須磨に謫居し一年近く経ったころ、宰相となった頭中将がにわかに訪れる。

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もののをりごとに恋しくおぼえたまへば、事の聞こえありて罪に当たるともいかがはせむと思しなして、にはかに参でたまふ。うち見るより、めづらしうれしきにも、ひとつ涙ぞこぼれける。（須磨・②二一三頁）[注1]

罪をものともせず来訪した宰相中将は、『無名草子』において「須磨の御旅住みのほど尋ねまゐりたまへりし心深さは、世々を経とも忘るべくやはある」[注2]と絶賛され、以来二人の友情を語る屈指の場面とされてきた。

ここに物語中一度だけ「ひとつ涙」が使われる。他の文献も含め初出であるため、語義はこの場面の用法を中心に導きだされ、最近では「悲喜こもごもの一つ涙」とする理解が通説となっている。その解釈は「うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり」（『後撰集』巻十六・雑二・一一八八）を引歌[注3]とする。

たしかに、この歌の大意を象徴的に示したことばのようにも見えるが、肝心の「ひとつ涙」という語は含まれておらず、疑問が残る。ところが、このことばは以後の物語や和歌にも現れ、『後撰集』および『源氏物語』を踏まえた表現ととらえられている。それゆえ、この語をどのように解するかは『源氏物語』の解釈の問題であるとともに、歌ことばとしての「ひとつ涙」の成立と享受の問題にもかかわってくる。

本稿は、『源氏物語』の解釈を検討し、語義理解の変遷を見定める

とともに、後述する各物語の読解についても修正をうながすものである。

二　問題の所在

該当箇所の諸注の解釈を新しいものから分類整理しておく。

【A】うれしさと悲しさが一つになって出る涙

○君を一目見るなり、珍しくも嬉しくも、悲喜こもごもの一つ涙がこぼれ出るのでした。（『正訳』訳）

○悲喜こもごもの一つ涙がこぼれた意。（『注釈』注）

○中将は君を一目見るなり、珍しくうれしく、嬉しさと悲しさが一つの涙になってこぼれた。（『鑑賞と基礎知識』訳）

○源氏の君のお顔を一目見るや、久方ぶりの懐かしさ、また会えたうれしさに、悲喜を分たぬ一つ涙がこぼれるのであった。（『新全集』訳・『完訳』訳）

○うれしさと悲しさ、二つの感情が同じ一つの涙になって流れるのだった。（『集成』注）

○君を一目見るやいなや、しばらくぶりのなつかしさ、また会えたうれしさに、悲喜を分かたぬ一つ涙がこぼれるのであった。（『全集』訳）

『正訳』は引歌を指摘しないが、それを前提とした訳となっており、かえって「悲喜こもごもの一つ涙」という理解が自明であることを示す。ただし、同じ引歌を認める解釈であっても、別の解釈もある。

【B】うれしいのに、悲しい時に流すのと同じ涙

○（源氏の逆境を悲しんだのと）同じ涙が（うれし涙として三位中将の目から）こぼれたことだ。（新版『岩波文庫』注）

○（源氏の逆境を悲しんだのと）同じ涙が（うれし涙として）こぼれた。（『新大系』注）

○源氏のお顔を見たとたん、初めて見るような気がして嬉しいにつけても、あの古歌ではないが、悲しい時と同じように涙がこぼれたのだった。（『学術文庫』）

○一寸お顔をお合はせになるより、暫らくぶりの御面会の珍らしさ嬉しさにつけて、いつぞやの悲しい別かれに、こぼしたのと同じ涙がこぼれるとは、「（略）」といふ後撰の名歌を思はせて皮肉である。（『完譯』訳）

○寂しく恋しき時と（ひとつ涙ぞ）（『大系』傍注）

○悲しい時に流れる其涙がこの嬉しい時にも流れた。（『對校』注）

『学術文庫』『對校』は具体的に「悲しい時」を想定しないものの、悲しさと嬉しさが一つになった涙とせずに、かつて悲しみの涙を流したけれども今回はうれし涙が、とする。しかし実は、まったく異なる次のような解釈もあった。

【C】二人がともに流す同じ涙

○顔をあわせるやいなや、珍しくうれしくて、いっしょに涙が流れだすのだった。（『評釈』訳）（注4）
○宰相中将も源氏も同様涙がこぼれた。（『全書』注）
○源氏も宰相も共に涙がこぼれた。（『新解』注）

引歌を認めず、「ひとつ涙」を「二人がともに流す涙」とするもので、この解釈にも一理あることを認め、詳しく考察したのが『全釈』である。

○河海抄・細流抄・弄花抄などは、後撰（略―保坂）を引歌として挙げる。歌の心は一致しているが、ことばの類似がやゝ少ないようにも思われるから、これと決めるのには躊躇される。金子氏・池田氏は「宰相中将も源氏も同じように涙がこぼれた。」とされる。引歌を考えないでよいのなら、この解が穏当であろう。（なお「こぼれ給ひける」とないのは、主語が「涙」であるから、許されるであろう。）又、後撰の歌によって訳す場合も、「うれしいのに、悲しい時（さびしく恋しい時）と同じ涙が流れた」の意とする説（宮田氏・吉沢氏・佐成氏・五十嵐氏・山岸氏）と、「現在うれしさと悲しさが一緒になった涙が流れる」と取る説（岷江入楚）とがある。今しばらく後者に従っておく。／対面するなり、珍らしくうれしいのにつけても、悲喜こもぐの涙がこぼれたのでした。（『全釈』注／訳）

結局は引歌を認めた現代語訳をつけているが、指摘のとおり、『後撰集』歌と『源氏物語』とでは語句の一致は少なく、『後撰集』歌には眼目となる「ひとつ涙」がない。にもかかわらず、なぜこれほど多くの注釈書が引歌とするのか。古注釈の影響と推察されるが、古注釈がどのような意識から挙げたのかは不明であり、厳密な意味での「引歌」としてではなく、いわゆる「参考歌」として挙げただけかもしれない。そこで単に歌を指摘する以外の古注釈を詳細に調べると、以下のような揺れに気づく。

○師　源にわかれゐるほどはうきなり、今かく逢ひ見奉る事はうれしき也。（『湖月抄』）
○私　あはれなるさまをみ奉るはうき也。又めつらしく今見奉るはうれしき也。（『岷江入楚』）
○私　喜憂一と也。三位中将に逢給と憂と一に涙かこほるゝと也。朋友深切之志可感之。（『孟津抄』）

『岷江入楚』は【A】説、『湖月抄』は【B】説、引歌を認めた上でも「うき」は光源氏と別れた時の心境か、現在の窮状を見ての思いか、古くから対立していたことがわかる。『孟津抄』の「喜憂一」という注は『細流抄』にもあるのだが、次の「三位中将に逢給」は注目に値する。さらに、歌を指摘しない次のようなものもある。

○前に大弐か参りたるは、君臣の礼、こゝに中将の参り給ふは朋友の信也。源氏は御心さしのありかたしとて、涙をなかし、なにくれともてなし、詩をつくり歌をよみなくさめ申給ふ也。

○おはしつきてもろともになみたにしつみて、　（『提要』）
（『源氏釈』）

『孟津抄』を含めたこれらの注が示唆するのは、涙を流す主体についてである。『源氏釈』は【C】説と同じで二人が主体、『提要』『孟津抄』は光源氏が主体となっている。

引歌を認めるか否か。泣く主体は光源氏か宰相中将か、あるいは両者か。問題は検証されぬままだった。(注5)

三　見る主体、泣く主体

はじめに、涙を流す主体から検討しておく。『孟津抄』『提要』は一連の主体を光源氏と解した。(注6)あまり顧みられないこの解釈にも、実はそれなりの根拠がある。宰相中将の来訪直前には、光源氏が涙を流す様子が次のように描かれていたのだ。

須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜は盛りになりぬらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

（須磨・②二一二頁）

この後に、先に引用した「いとつれづれなるに」と続くのである。二つの「つれづれなる」はどちらも光源氏の様子であるため「うち見るより」の主体も源氏と考え、往時を思い出し泣き暮らしていたところに、宰相中将が来てくれたうれしさから、憂いと喜びの涙がこぼれたと解したのであり、この理解であれば『後撰集』歌の詞書とも通じそうである。

しかし、やはり「三位中将は」とあり、その題目提示の「は」は文をまたいで機能すること、続く「住まひ給へるさま、言はむ方なく唐めいたり」の後には宰相中将の目を通して、源氏の住まいが描写されることを考え合わせると、この「うち見る」主体だけ光源氏と考えるよりも、やはり宰相中将とすべきと思われる。しかし、その場合「つれづれなるに」の落ち着きの悪さは残り、しばらく光源氏に言及がない。そのことが気になったからか、賀茂真淵は「うち見るより」を、「源も宰相も相見たるをかねたりとも見ゆ」と光源氏と宰相が互いに、とする見方を示した。(注7)ただし、「かたみに」あるいは「あひ見る」ではないため苦しいところであるが、「相見たるをかねたり」程度の含みは認めることはできる。(注8)結局、見る主体は宰相中将と考えるほかないのだが、当然その際には光源氏も宰相中将を見ることになり、涙をこぼす主体としては宰相中将と光源氏の二人と考える余地は残る。

四　和歌との関わりから

次に、引歌の問題へと進みたい。まずは『後撰集』歌を確認しておく。

・うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり
　もの思ひ侍りけるころ、やむごとなきたかき所より
　とはせたまへりければ　よみ人しらず
（『後撰集』巻十六・雑二・一一八八）

詞書によれば、物思いのころ、貴人から慰めのことばをかけてもらったことへの感謝の歌である。歌意はうれしいこともつらいこともそれを感じる心はひとつであって、それを区別できなくさせるのはどちらの時も同じく流れる涙であったよとなる。一見すると、うれし涙だけなのか、悲しみの涙とうれし涙とが混じっているのかは定かではないが、詞書をふまえれば、おことばを頂戴した感動から涙を流しているのだが、傍目にはそれまでと区別がつかないということになる。本文は「ひとつ涙」ではなく「心はひとつにて」とあり、歌の「分れぬものは涙」と須磨巻の「ひとつ涙」の間にはやはり表現上の懸隔があると言わざるを得ない。『後撰集』歌はあくまで涙は悲喜の区別がつかないとするだけであり、この歌を須磨巻の解釈に敷衍し、悲喜が入り交じった一つの涙とは解釈するには、そうした意味での「ひとつ涙」の成立をこの場面に見なければならないだろう。

はたして、そのような語句がここに誕生したのだろうか。『国歌大観』によれば、「ひとつ涙」を含む歌は早くて鎌倉時代に二例、全用例で一一例しか見いだせない。もっとも古い用例は、飛鳥井雅有（1241～1301）の次の二首である。

・むしのこゑしかの鳴くねも秋はただひとつ涙にあはれとぞきく
　秋の歌の中に
（『隣女集』巻四・二〇六〇）

・よのうさも人のつらさも神無月ひとつ涙にふる時雨かな
　人のもとに申しつかはし侍りし
（『隣女集』巻四・二一九四）

一首目は「むしのこゑしかの鳴くね」のどちらも秋は「ひとつ涙に」しみじみと聞くという意、二首目は「よのうさと人のつらさ」どちらによっても「ひとつ涙」が流れるとする歌である。「神無月」に「うさ」「つらさ」から泣くのだから、悲喜こもごもの涙とは考えられない。為家に『古今集』や『源氏物語』を学んだ雅有だが、内容上の連関を見られない。次に古いのが正徹（1381～1459）の歌である。

・袖はなどひとつ涙ぞあはれともうしとも思ふ秋のゆふぐれ
　秋夕
（『草根集』三六五八）

遠恋

・わすれずはひとつ涙や思ひやるほどは雲井の月に落つらん

（『草根集』六九一〇）

懐旧

・うかりしもなさけありしもふることをしのぶやひとつ涙なるらん

（『草根集』一〇二六二）

一首目は、感じ入るときもつらいときも、どうして「ひとつ涙」なのかという意、三首目も相反する「うかりし」ことも「なさけありし」ことも含め過去を偲ぶせいか、「ひとつ涙」がこぼれるようだとする。この二つの「ひとつ涙」は悲喜どちらによっても同じようにでる涙ととらえられる。悲喜こもごもの涙とも解釈できそうであるが、『源氏物語』に通暁する正徹であるなら、[注9]もっとはっきりと須磨巻とつながる歌い方をするのではなかろうか。たとえば、二首目は次の歌を踏まえた「一対にいふべき歌」（『正徹物語』七〇段）と推察される。

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせる。

・忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで[注10]

（『伊勢物語』一一段／『拾遺集』巻八・雑上・四七〇）

この「忘るなよ」を受けて詠まれたことはわかるのだが、正徹歌は「月に落つらん」などの細部は解釈が難しい。大意は、忘れていないならば、思いをはせる距離は雲井ほど遠くなっても袖に映った月に「ひとつ涙」が落ちているだろうかというところだろう。この「ひとつ涙」は自分と同じ涙とも昔と同じ涙とも解釈できるが、悲喜こもごもの涙と理解する余地はない。一首目は季節が春と秋で異なるし、三首目も「懐旧」であり、再会のうれしさとは関わりがないことを踏まえると、正徹でさえ源氏に由来する語としての「ひとつ涙」の意識は薄いのである。正徹以降の例からも「ひとつ涙」が悲喜こもごもの一つ涙として成立していたとは判断し難い。[注11]

以上、『後撰集』歌を須磨巻「ひとつ涙」の解釈に当てはめるのは語句や内容に隔たりがあるため無理であること、また『源氏物語』を読み込んだ中世歌人の歌に「ひとつ涙」を悲喜こもごもの涙と積極的に解釈可能な用例は見えず、単に同じ涙と訳せることを確認した。

五　引歌にあらず

「ひとつ涙」は同じ涙と訳せるとしても、「同じ」は何と何が同じなのか。須磨巻の解釈に当てはめると【B】説はつらさとうれしさであり、【C】説は宰相中将と光源氏ということになる。では次に【B】説の可能性を検討したい。前節でみたように、歌では「うし」「うれし」とともに詠まれる場合が多かったが、類義語「同じ涙」がより多く使われる傾向にある。

・うすくこくころものいろはかはれどもおなじなみだのかかる

そでかな　（『後拾遺集』巻十・哀傷・五九〇・平教成）

・うきせにもうれしきせにもさきにたつ涙はおなじ涙なりけり
（『千載集』巻十七・雑歌中・一一一七・藤原顕方）

・うれしきもつらきもおなじなみだにてあふ夜もそでは猶ぞかわかぬ
（『新勅撰集』巻十三・恋歌三・七八七・皇嘉門院別当）

・うらむるもこふる心のほかならでおなじ涙ぞせくかたもなき
（『続千載集』巻十五・恋歌五・一六一一・為家）

これらの用例からすると、うれしい時もつらい時も同じ涙が流れる意なら、「同じ涙」を用いてもよいと思われるが、『源氏物語』中に「同じ涙」[注12]はなく、他の散文作品でも『浜松中納言物語』に一例あるだけである。しかし、いずれにせよ「同じ涙」「ひとつ涙」とも散文の用例は歌より少ない。なぜかといえば、次のような表現ができるからだろう。

・例のことなれば、しるしあらじかしとくづほれてながめ臥したまへるに、胸うちさわぎていみじくうれしきにも涙落ちぬ。
（紅葉賀・①三三〇～三三一頁）

・君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やをら押し開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。　（賢木・②一〇九頁）

・（小君は姉の浮舟が）亡せたまひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに、かくのたまへば、うれしきにも涙の落つるを、恥づかしと思ひて、　（夢浮橋・⑥三八四頁）

・（吉野姫君）わりなくはづかしけれど、すこし頭もたげて、顔をもて隠し給へるに、むげに言ふかひなくのみ見え給へるに、（中納言は）めづらしくうれしきにも、まづ涙出できて、
（『浜松中納言物語』巻五・四二九～四三〇頁）

初めの二例は、ともに光源氏が藤壺とのやりとりで流した涙である。一例目は期待していなかった藤壺の返書を得た感動を、二例目は昼の光の下で藤壺を見た感動を表す。『浜松中納言物語』の用例も、吉野姫君を間近で見た中納言の喜びを表す。夢浮橋巻の例は、死んだと思っていた姉浮舟の生存を小君が薫から知らされる場面である。うれしいときにも涙が溢れ出るさまをいうのであれば、たしかにこれらの表現でも十分伝えうる。賢木巻は須磨巻とほぼ同じ表現であるにもかかわらず、引歌を指摘する注釈書はない。

それでは逆に、『後撰集』歌を引歌とする表現は他にあるのか。『源氏物語引歌索引』[注13]には、葵巻・藤裏葉巻・柏木巻の三例が指摘されている。以下に注釈書とともに挙げる。

・大将殿は、悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば、ただならぬ御あたりのとぶらひどもも心憂しとのみぞなべて思さるる。院に思し嘆きとぶらひきこえさせたまふさま、かへりて面だたしげなるを、うれしき瀬もまじりて、大臣は御涙の暇なし。　（葵・②四六～四七頁）
〔湖〕〔余〕〔事〕

・いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、ひとつものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、

（藤裏葉・③四五一～四五二頁）

〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

・（落葉宮の母御息所）「……いまはとてこれかれにつけおきたまひける御遺言のあはれなるになむ、うきにもうれしき瀬はまじりはべりける」とて、いといたう泣いたまふけはひなり。

（柏木・④三三一頁）

〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔事〕〔評〕〔集〕

葵巻・柏木巻ともに弔問の場面である。「うき」状態で悲しみに暮れながらも、「うれしき瀬もまじり」涙を流す。「うれしき瀬」を含む歌は先にみた『千載集』顕方歌以外にも、以下のような例がある。

・心みに猶おりたたむなみだがはうれしきせにも流れあふやと

（『後撰集』巻十・恋二・六一二・橘敏仲）

・水まさる心地のみしてわがためにうれしきせをば見せじとやする

（『後撰集』巻十三・恋五・九九三・をとこ）

・いのりつつたのみぞわたるはつせ川うれしきせにもながれあふやと

（『古今六帖』三・かは・一五七〇）

「まじり」を含む歌があれば良いのだが、見つからない。うれしさとつらさがまじりあった涙、前節で見た悲喜こもごもの涙として葵巻と柏木巻の例がある。しかしながら、そのような二つの感情が一緒になった涙を「ひとつ涙」と表現してはいないのである。ここでも引歌とされる『後撰集』歌には、あくまで「心はひとつ」とあるだけなのだ。さらに、「瀬」はない。であるなら、葵巻・柏木巻の用例に『後撰集』歌を引歌として認める必要があるのだろうか。むろん「引歌」の定義にもよるが、歌を経由せずとも十分解釈できる。悲しき折に高貴の人から慰問を受けてである点は詞書に合うものではあるが、うれしいときにもつらいときにも涙はでるという発想自体は、和歌として珍しいものではない。[注14]

・世にはねをわびてなくだにある物をうれしきにさへおつるなみだか

（『躬恒集』一九三）

つくしにて、をんなにあひて、あか月がたにいひやる

・なにごとのけさはうれしき我なれやなみだはわかぬものにざりける

（『重之集』五八）

・うれしきもつらきもことにわかれぬは人にしたがふ心なりけり

（『続後撰集』巻十・釈教歌・六二五・選子内親王）

こうした発想による歌の一つに『後撰集』歌がある。その発想は表現の前提になっているが、「うれしき瀬」という語がない歌をあえて引歌として『源氏物語』の解釈に援用する必要はないのではないか。ほぼ同じ表現であるにもかかわらず、葵巻と柏木巻とで引歌を

指摘する注釈書に出入りがあることがそのことを如実に示している。

一方で、藤裏葉巻の用例は注意が必要だろう。娘の入内に際しての感慨を、うれしい涙と悲しい涙が同じものだとは思われないと、明石の君がうれし涙を流す場面である。先の二つとは異なり、純粋なうれし涙を流し、今までのつらく悲しい涙と対比している。これのみ「ひとつもの」とあることから、まさに『後撰集』歌を介した解釈が求められる。『岷江入楚』私説が「うれしきにもうきにも涙のおつる所は同しもの也」「されともうれしきとうきとの心はひとつ物にはあらすと引かへたる歟」[注15]と指摘するように、「心」は「ひとつ」でないと見て、それゆえうれし涙は「とどまらぬ」という流れに位置づけなければならない。

翻って、須磨巻はこのように『後撰集』歌に基づく解釈を要請しているだろうか。これまでの検討をまとめると、『後撰集』歌の「涙は悲喜を分かたぬ」という発想自体は他にも多く見られるものであった。また、それを現代の諸注釈書が引歌表現であると指摘する『源氏物語』の用例はそれぞれ解釈に取りこむべき水準が異なっているのであって、同様に扱えるものではなかった。古注釈が挙げた歌をいわゆる「引歌」の射程と同列に扱うべきではなかったのである。そもそも、『後撰集』歌には「ひとつ涙」という語はなく、悲喜の入り混じった涙という解釈の余地はなかったのだ。

それでも「ひとつ涙」に定着された叙情性を見ようとして、諸注釈書は物語に現れない頭中将の「うき」を一年前、あるいは現在に想定する。または、主体を光源氏とし、直前にあった過去を思い出し悲しみに暮れる姿を「うき」とし、『後撰集』歌とのつながりを見いだす。いずれも歌に合わせて解釈を試みているかのようである。『後撰集』歌はうれしいこともつらいことも感じる「心はひとつ」とした上で、涙はどちらの感情から出るのか区別できないといっているだけなのだ。無理をおしてあてはめる必要はなかったのである。

六　「ひとつ＋名詞」

引歌を想定しないとすると、残るは【C】の解釈である。この場合、特別な意をもつ歌ことばとしてではなく、「ひとつ＋名詞」の複合ととらえることになる。「ひとつ」には単一であることをしめす「ひとつ子」「ひとつ所」といった用法もあるが、同一のものを示す用法もある。ここで改めて、後者の「ひとつ」を検討したい。

題しらず　　よみ人しらず

・みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける　（『古今集』巻四・秋歌上・二四五）

・なくむしのひとつこゑにもきこえぬはこころごころにものやかなしき

（『詞花集』巻三・秋・一二〇・和泉式部／『和泉式部集』一三六・八六一）

「ひとつ草」は同種類の草の意で、「春・ひとつ・草」と「秋・いろいろ・花」の対比から用いられる。「一つ声」は同じ声であり、「ひ

とつ」と「心々」の対比の興を示す。「同じ」と「ひとつ」は意味が似ていても当然差異があり、他の語との対比関係等により選択される。[注16] 検証してきた『後撰集』歌も「わかれ」との縁で用いられていたと思われる。[注17]

また、小山登久「「ひとつ」を語基に持つ複合語をめぐって」[注18]は、同一の作品内において「ひとつ」の直後に言い換えとして「同じ」が来る例が多いが、「単なる言いかえとして使用されているのではない」例も指摘する。代表例が『蜻蛉日記』にみえる「ひとつ車」と「同じ車」であり、「ひとつ車」は複数の人が一つの車に一緒に乗る相乗りの意で用いられることが多く、同時性を含まない場合が「同じ車」であるとした。

これらの結果をもとに、須磨巻において「ひとつ」が用いられた理由を考えてみたい。前節で確認したように、悲しいときと同じ涙がという意の表現としては賢木巻に「めづらしくうれしきにも、涙落ち」が用いられていた。わざわざ「ひとつ涙」とするからには、「涙」とも「同じ涙」とも異なるニュアンスがあるはずである。歌の用例からは複数性との対照によって「ひとつ」が要請されることが多かった。須磨巻での複数性とは悲喜こもごもといった感情の多様さではなく、光源氏と宰相中将の二人が同時にということではなかったか。そう考えれば、源氏と宰相中将が単に「同じ涙」を流すというのでは表せない、二人が一体となって喜び合っている状況を「ひとつ涙」で表現していたことになる。そして、この用法は「複数人が一緒に同じ車に」の意で相乗りを意味する「ひとつ車」の使用法と齟齬しない。「同じ涙」は時間的に先後する場合にも用いられるため、同時性を強調できない。また「ともに」では都と須磨とに遠く離れていた二人がようやく出会い、時と場所を同じくして涙を流すという一体感が弱い。つまり、須磨巻では「同じ涙」や「ともに」では表現ができない、複数人がともに流す涙を表現するために「ひとつ涙」が選択されていたと考えられるのである。

七　『栄花物語』『浜松中納言物語』『苔の衣』の「ひとつ涙」

仮名散文における「ひとつ涙」は『源氏物語』以後わずかながら見られる。

・故上の御事をかへすがへす聞えさせたまひつつ、誰もいみじう泣かせたまふ。よろづ一つ涙といふやうに見えさせたまふも、あはれに見えさせたまふ。

（『栄花物語』浦々の別・①二九四頁）

・（中納言は吉野姫君と）几帳ばかりの隔てだになく、明け暮れかたはらにて経は読みつつも、（唐后の）おはせしありさま、のたまひしことなど、尽きせず語り出で給へば、ひとつ涙に浮かみ給ひて明かし暮らし、

（『浜松中納言物語』巻四・三六六頁）

・中納言おどろきて、（宮を）入れたてまつり給ふ。ことのよろしきにこそありけれ、かしこまりもえ置きあへず、枕に火を近うて、宮も中納言もひとつ涙を流して、まもりあつかはせ給ふ。

（『浜松中納言物語』巻五・四二三頁）

・（宮に襲われ）女御はただ夢路におぼるる心地して、たけきこと

とは泣き悲しみ給ふさま言はんかたなし。（中略）今ひとしほの近まさりに（宮）「またはいつかはかばかりの夢の中の対面も」と思し続くるままに、今一際思ひ添ひぬる心地して、一つ涙に溺れ給ふさま御身も浮きぬべし。

（『苔の衣』冬・二一八～二一九頁）

いずれも『源氏物語』の影響を深く受けている作品であるため、注釈も『源氏物語』からの引用を指摘することに重点がおかれがちだった。しかし、こうして列挙すれば明らかなように、すべての用例が複数の主体が一緒に泣くさまと解釈できる。

ところが、これまで『源氏物語』を経由して『後撰集』歌を想定する注がつけられていた。たとえば、『栄花物語』については、次のようにあった。

○（頭注）「うれしきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり」（後撰・雑）をふまえる。再会を喜んでも涙を流し、母の薨去を悲しんでも涙をながすのである。

（訳）故母北の方（貴子）の御事を尽きることなくお申しあげになっては、誰もひどくお泣きになる。うれしいにつけ悲しいにつけ、何事につけても涙は同じといったふうにお見えなさるのも、感慨無量のご様子である。（新全集『栄花物語』頭注／訳）

しかし、これも「一つ涙」にではなく、「よろづ」の方にうれしいとき、かなしいとき、つらいときが含まれており、万事につけ「誰も」が一緒に涙を流していると解釈すべきであろう。筑紫からはるばる帰京した伊周と中宮とが再会を果たし、一体となって泣くさまを強調しているのである。

『浜松中納言物語』巻四「ひとつ涙に浮かみ給ひて」は、吉野姫君と中納言が一緒に泣いてひとつの涙に浮かんでいる。『苔の衣』「ひとつ涙に溺れ給ふ」は、宮と女御が原因は異なるけれど、二人とも悲しみの涙を流し、その涙で溺れるとする。「ひとつ涙」が「涙に浮く」という比喩的表現と結びつき、より詩的語句へと変化していく過程がうかがえる。巻五の用例には以下のような注がついていた。

○……つまり、「一つ涙」は憂きことと嬉しきこととが共存する状態をいうのである。ここでは中納言と式部卿の宮両人の憂きことと嬉しきこととが相重なるということを意味する。涙を流す心の中味ではなく、別々の人が同様に涙を流すことを「一つ涙」といっている。……

（『浜松中納言物語全注釈』巻五・一二三一頁）[注19]

引歌の指摘など必要なく、確認してきたように中納言と式部卿の宮が一緒になって涙を流すという指摘で十分なのだ。

八　結語

『源氏物語』を中心に、他の物語作品を含め散文では「ひとつ涙」を「複数の人物が一緒に流す涙」として解釈すべきであることを明

らかにした。須磨巻の解釈としては、涙をこぼすのは宰相中将と光源氏二人であり、「（宰相中将が光源氏と）対面するやいなや、珍しくうれしいのにつけても、ともに同じ涙がこぼれたのだった」の意となる。光源氏も泣いたのである。物語成立当初は当たり前に理解されていた語義がわからなくなり、注釈作業を通して悲喜こもごもの一つ涙という意味が付与されていったのである。

その「ひとつ涙」が歌に使われ始めたのは、中世歌人たちの『源氏物語』享受後であった。とはいえ、須磨巻を引き受けたものと即断できない。これら歌の「ひとつ涙」は多様な意を有し、内実はその都度文脈により確定していくしかないが、少なくとも『源氏物語』須磨巻を踏まえていたとまではいえない。歌ことばとして十分に成熟せず、歌人たちになじまれなかったのであろう。

すなわち、古注釈が掲げた『後撰集』歌の受け止め方に慎重さを欠いた現代の注釈書が『源氏物語』須磨巻の「ひとつ涙」を誤読し、それを前提として『栄花物語』『浜松中納言物語』を読む注釈書が現れた。そうして見いだされたのが、悲喜こもごもの涙という意味の「ひとつ涙」だった。

本稿で引用する『源氏物語』の注釈書およびその略称は次のとおりである。

・『提要』……稲賀敬二『源氏物語古注集成　今川範政源氏物語提要』（桜楓社、一九七八年）
・『孟津抄』……野村精一　『源氏物語古注集成　孟津抄』（桜楓社、一九八〇年）
・『覚勝院抄』……野村精一・上野英子『源氏物語聞書　覚勝院抄』（汲古書院、一九九〇年）
・『源氏釈』……中野幸一『源氏物語古註釈叢刊　第一巻』（武蔵野書院、二〇〇九年）
・『岷江入楚』……中野幸一『源氏物語古註釈叢刊　第七巻』（武蔵野書院、一九八六年）
・『一滴集』……吉澤義則『未刊国文古註釈大系』（帝国教育出版、一九三六年）
・『湖月抄』……有川武彦『増註源氏物語湖月抄』（弘文堂、一九二七年）
・『新釈』……秋山虔・鈴木日出男『賀茂真淵全集』（続群書類従完成会、一九七九年）
・『新解』……金子元臣『定本源氏物語新解』（明治書院、一九二五年）
・『對校』……吉澤義則『対校源氏物語新釈』（国書刊行会、一九七一年←一九四六年）
・『全書』……池田亀鑑『日本古典全書　源氏物語』（朝日新聞社、一九四九年）
・『全釈』……松尾總『全釈源氏物語』（筑摩書房、一九六一年）
・『完譯』……五十嵐力『昭和完譯源氏物語』（東洋印刷、一九五九年）
・『大系』……山岸徳平『日本古典文学大系　源氏物語』（岩波書店、一九五九年）

・『評釈』……玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、一九六五年）
・『全集』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛『日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九七二年）
・『集成』……石田穣二・清水好子『新潮日本古典集成　源氏物語』（新潮社、一九七七年）
・『学術文庫』……今泉忠義『新装版源氏物語』（講談社、二〇〇一年←一九七八年）
・『完訳』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『完訳日本の古典　源氏物語』（小学館、一九八四年）
・『新大系』……柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『新日本古典文学大系　源氏物語』（岩波書店、一九九四年）
・『新全集』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九九四～一九九八年）
・『鑑賞と基礎知識』……日向一雅『源氏物語の鑑賞と基礎知識　須磨』（至文堂、一九九八年）
・『注釈』……山崎良幸・和田明美・梅野きみ子『源氏物語注釈』（風間書房、二〇〇三年）
・『正訳』……中野幸一『正訳源氏物語　本文対照』（勉誠出版、二〇一六年）
・新版『岩波文庫』……柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『源氏物語』（岩波書店、二〇一七年）

注

（注1）『源氏物語』『無名草子』『伊勢物語』『栄花物語』『浜松中納言物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に、『若の衣』の引用は中世王朝物語全集（笠間書院）に、和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。当該部分において河内本系は「めづらしううれしきに」とあり「も」がない。「も」があることで余計に「うきも」を想像させることが考えられるが、「も」のない河内本系本文の注釈書も引歌を想定する。後述するように、涙は悲しいときにでるのが前提となっており、「も」の有無は引歌想定に影響しなかったと思われる。

（注2）新全集『無名草子』、一九八頁。

（注3）「引歌」の内包する意味は多様であるが、ここでは宣長＝片岡説（片岡利博『異文の愉悦　狭衣物語本文研究』笠間書院、二〇一三年）の定義に従い用いる。

（注4）注に「『後撰集』（中略―保坂）この歌によるのだと、今は、うれしいのに、悲しむ時と同じ涙。また、会ううれしさと、京ではない悲しさといっしょになった涙。の二解がある。この歌の言葉だけを用いたのなら、二人は同じように涙がこぼれた、となる。」とある。

（注5）なお、辞書類において、「ひとつ涙」を項目として挙げるものは少なく、北山谿太『源氏物語辞典』（平凡社、一九五七

年）は「ひとつ」の項で須磨巻を例に「一つ涙（悲シキ時ト同ジ涙ノ意）ぞこぼれける」とし、『日本国語大辞典』（小学館、第一版一九七五年、第二版二〇〇一年）は第一版・第二版ともに須磨巻と『苔の衣』を例に「同じ涙。他の人と同じ理由で流す涙。」とする。結局、この須磨巻をどのように解釈するかによって「ひとつ涙」の意味が決定することになる。

（注6）『提要』は場面全体についての注なので今は措く。また、新全集『浜松中納言物語』頭注も「（ひそかに来訪した頭中将を）うち見るより」とある。

（注7）『新釈』「或説に宰相の源を見る事とせり、されと源も宰相も相見たるをかねたりとも見ゆ」、また『覚勝院抄』にも「源氏ト三位中将ト也」とある。

（注8）『全釈』は「うち見るより」に敬語が無いことに着目し、見る対象を「住い」とするか、「うち見るより」が一つの慣用句となっていた可能性を考える。他に「うち見るより」の例はなく、対象が「住まい」であったとしても、主体が光源氏か宰相中将であれば敬語はつくはずであり、説明に無理がある。語り手が宰相中将により添っているため敬語がつかなかったと解するのが無難であろう。『新釈』の「或説」は、『岷江入楚』の「宰相の君の源氏をみたてまつる心歟」を指すと思われる。

（注9）正徹の『源氏物語』摂取については、安達敬子『源氏世界の文学』（清水堂出版、二〇〇五年）、阿尾あすか「正徹の『源氏物語』摂取について」（国文学研究資料館平成二〇年度研究成果報告『物語の生成と受容④』国文学研究資料館、二〇〇九年三月）、江草弥由起「正徹の物語歌摂取考」（『中世文学』五九号、二〇一四年六月）など。正徹は『一滴集』（一八五頁）において、「うれしきに」に「ウレシキモウキモ心ハヒトツニテワカレヌ物ハ涙ナリケリ」と注している。また、『草根集』には宰相中将の目からみた源氏の住まいの描写「竹編める垣」（須磨・②二一三頁）からとったと思われる「此山の陰のともし火消ぬよもあらしの窓に竹あめる垣」という歌もあること、安達前掲書三一三頁に指摘がある。

（注10）『拾遺集』では橘忠幹が女性に送った歌とあり、相手の性別が変化している。『伊勢物語』の成立とも関わる問題だが、本来は女性への歌であることは疑えないだろう。

（注11）佐伯真一「「ひとつはちす」考」（『青山語文』四二号、二〇一二年三月）は、『源氏物語』において「同じ台」「同じ蓮」という語で表されていた〈縁者の同蓮〉の発想が〈同行の同蓮〉の発想と交わり、鎌倉時代には歌語「ひとつはちす」として定着したことを指摘する。「ひとつ涙」はそこまで至らなかったということになる。

（注12）七節で扱う巻五・四二三頁の「ひとつ涙」の直後に言い換えとして「同じ涙」が使われている。

（注13）伊井春樹『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年）。鈴木日出男『源氏物語引歌綜覧』（風間書房、二〇一三年）

は、葵巻を除いた藤裏葉巻と柏木巻を挙げる。

（注14）工藤重矩『和泉古典叢書3　後撰和歌集』（和泉書院、一九九二年）に指摘がある。

（注15）中野幸一『源氏物語古註釈叢刊　第八巻』（武蔵野書院、一九九七年）二一一頁。

（注16）『古語大辞典』（小学館、一九八三年）のように、「同じ心」は「同じような気持ち。同じ考え。類義語「ひとつ心」は心を合わせ協力するさまで、区別がある」とする説もある。

（注17）木船重昭『後撰和歌集全釈』（笠間書院、一九八八年）に指摘がある。

（注18）『赤羽淑先生退職記念論文集』（赤羽淑先生退職記念の会、二〇〇五年）所収。ただし、「ひとつ涙」への言及はない。

（注19）中西健治『浜松中納言物語全注釈』（和泉書院、二〇〇五年）。

（ほさか　さとし・北海商科大学准教授）